

ザリガニをめぐる冒険： 自然との出会いをつくる環境教育としてのお散歩保育

Looking for Clayfish in Paddy Fields; On Teaching Enviromental Issues at Nursery School

南 元 子

Motoko MINAMI

はじめに

2018年に改訂された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」において、これまで以上に重要な意味を持つようになった一つが「環境」である。ここで重視されるのは「環境を通して行う教育」であり、これからの幼児教育あるいは保育において、子どもがどのように周囲の環境に関わるべきか、また保育者は、子どもの育ちの場としての環境をどのように整備するかを、常に留意することが求められていると言ってよいだろう。当然のことながらここでいう「環境」は、幼稚園、保育所あるいは、こども園の中という狭義「環境」に限らず、園の外におけるさまざまな「生きる力の基礎」を育成する場・機会としての「環境」であることは言うまでもない。このことは「幼稚園教育要領」を例に挙げれば「第1章 総則 第1 幼稚園教育の基本」の初めに、子どもが「身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期」(p7)の重要性が謳われていることから明らかであろう。本論文では、1989年に『幼稚園教育要領』『保育

所保育指針』に「環境」が取り入れられて以来、保育や幼児教育においてその重要性が増し続けている「環境」が、幼児教育や保育での5領域の活動においても特に重要な位置を占めうることを、愛知県額田郡幸田町にある公立保育園（くま組：異年齢クラス24人）での実践例を通して考察する。

1. 幼児教育・保育における「環境」

「幼稚園指導要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3法令では、「環境」のねらいを「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」(p18)としている。そして内容の取扱い上の留意すべき事柄として次のようにある。

子どもが、遊びの中で周囲の環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。また、他の子どもの考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自分の考えをよりよいもの

にしようとする気持ちが育つようにすること。(pp18-19)

この中で特に注目したいのが、「周囲の環境と関わり」「他の子どもの考えなどに触れること、つまり自分を取り巻くさまざまな他者と接することで「自分なりに」つまり「主体的」に「考えることができるようになる過程」という点である。幼児の育ちにおいて求められるのは、知識としての正解を得ることではなく、「試行錯誤」をしながら考える過程（プロセス）である。そしてそのプロセスが多層的、つまり（1）健康な心と体、（2）自立心、（3）協同性、（4）道徳性・規範意識の芽生え、（5）社会生活との関わり、（6）思考力の芽生え、（7）自然との関わり・生命尊重、（8）数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、（9）言葉による伝え合い、（10）豊かな感性と表現という「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（pp8-9）に深く結びついていることが理想である。

このような「環境」領域の理想的な活動として、愛知県額田郡幸田町にある公立保育園（くま組：異年齢クラス24人）で、5月から12月にかけて行われた「ザリガニ取り」の保育その実践記録をもとに領域横断的な「環境」活動として分析に検討してみよう。

II. ザリガニ取りの保育記録を読む

愛知県額田郡幸田町には8つの公立保育園があり、全園において継続的にお散歩を保育に取り入れている。平成24年4月から7年間にわたり、主任保育士が月に一度集まり研究会を開き、お散歩と保育について研究を深め、その成果は、平成31年2月の愛知県保育研究会集会で、『お散歩の保育実践と保育士成長における意義に関する研究 一日常の保育実践をリフレクティブな視点から捉え直すために

一』と題して発表した。またスーパーバイザーとしてこの研究会に参加していた筆者は、研究会のメンバーである星野千絵とともに、『日常に潜むドラマで遊ぶ ―「お散歩」を舞台にのせるまで―』と題して、第68回日本保育学会にて、お散歩から生まれた「いつもの出来事」を劇遊びに発展させていったプロセスを発表した。本論文では、この星野のクラスで展開された、初夏の保育に取り入れられる「ザリガニ取り」の実践記録に注目し、その記録を3期に分けて分析する。

(1) 第I期：失敗続きのザリガニ釣り

保育記録1：はじまり

くま組では、入園式翌週の月曜日（4月11日）から、近くの公園や小学校へお散歩に出かけ、一か月後には、年少児も往復2キロほどの距離を歩くようになっていた。初夏にさしかかり、日差しが強くなり暑い日が続くようになると、お散歩は川遊びや田んぼの水路へと移っていき、子どもたちは次第にザリガニ取りにクラスが夢中になっていった。

保育者は、最初から子どもたちにザリガニを探すように指示をしているわけではない。図1の写真からも、何に興味を持ち、お散歩の中でどのような生き物や草花に目を向けるかを決めるのは子どもたちであり、保育者は特別な方向付けをしないようにしていることが分かる。保育者は、子どもたちが自分を取り巻く自然環境と関わる様子がある程度想定し、子どもたちの動きに合わせて対応できるように、いくつかの可能性を前提にお散歩の準備をしている。図1によく表れているが、子どもたちが全員同じ川の方角を見ているのではなく、それぞれが自由に周囲のものに目を向け、自分が「発見したこと」を、その都度保育者に教えたり、質問をしたりしている



図1 散歩をはじめ毎日の保育園での生活に慣れた子どもたちは、普段見慣れた風景の変化、草花、小川の中の生き物に目を向け、気づいたこと、発見したこと、考えた事などを積極的に保育者やお友達と話すようになる。

点に注目したい。このような日々の活動の中で、子どもたちは身の回りの生き物や草花、時には畑に放置されている機器などに好奇心を持ち、「なぜ？」を考えるようになるのだろう。環境教育としてのお散歩保育の重要な点は、このような「好奇心を持つ姿勢」をいかに育むかにあると言えるだろう。

保育記録2：5月23日（1日目）

保育園から1キロほど山へ向かった田んぼへ、初めてのザリガニつかみへ出かける。

保育士が一匹つかみ、子どもたちは大喜びしたが、あまりにも弱ったザリガニだったので、年長・男児が「先生、弱っとるで、にがしてあげりん」と提案し、クラスで相談してザリガニを田んぼへ逃がすことにした。

偶然、そこで農作業をしていたおじさんが、一緒にザリガニを探してくれて、大きなアメリカザリガニを捕まえてくれた。この時は、他にドジョウ、オタマジャクシ、タニシをつかまえ、保育室へ持ち帰った。

ザリガニを逃がそうと提案した男児は、ザリガニ取りを契機に積極的になっていき、家に帰ってからも保育園での出来事をよく話す

ようになったようだ。子どもに案内されて、休日に保護者もザリガニを取りに行くようになり、保護者会では、そのような姿が母親からも報告された。

上に述べたように、お散歩の最初の目的は「ザリガニ取り」ではない。頻繁にザリガニを目にするようになり、次第に「触ってみたい」「捕まえてみたい」という気持ちになっていったようだ。子どもたちが、せっかく捕まえたザリガニを逃がしてやろうと言えるのは、ザリガニをはじめ自然への興味関心が、必ずしも「捕まえる」という目的とは別のものから始まっているからだろう。ザリガニなどの生き物を捕まえる、採集すること自体には教育的な意味もあるだろうが、「環境教育としてのお散歩保育」が目指すのは、あくまでも子どもたちが身近な自然環境との関係をどのように構築していくのかというプロセスであり、結果的に生き物を採集することになっても「採集を主たる目的としない」ということが肝要なのである。『幼稚園指導要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』には「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」が「育ってほしい姿」として中に挙げられているが、「採集」を主たる目的にしないからこそ、そういったことを体験的に身に付けることができるのである。「逃がしてやろう」と提案した子どもが、ザリガニに興味を持つようになり、それがきっかけとなり家庭でザリガニについて話をしたり、家族でザリガニを捕まえに行ったりと、行動や興味関心の範囲広がっていくように、お散歩保育など日々の保育が、子どもの生活にさまざまな影響を与えていることは重要である。

保育記録3：5月28日（5日目）

最初のザリガニとの遭遇から5日後に、同じ用水路にザリガニを探しに出かけた。「いた、いたよ。あそこ」と、石と石の間からザリガニが見えるのにつかめず、ついつい保育士が棒で押し出そうとしたために、ザリガニはさらに奥へ隠れてしまった。子どもたちに「先生、待たないとだめだよ」と諭され、保育士は「はい、そうだね。ごめんね」と答えた。クラスみんなで、張り切って出かけたが、この日の収穫はゼロだった。

6月6日（14日後）

前回のリベンジで3回目のザリガニ取りへ出かけた。前回、棒で押しすぎて失敗してしまったことを踏まえて、今度は餌で釣ろうと考え、竿を作って出かけた。糸の先のクリップに、サキイカをつけて待ったが、肝心のザリガニの収穫はゼロで、最初の日に近所の人にもらったザリガニを除くと、3回続けて失敗で、クラスの子もたちの力でザリガニを取ることはできなかった。

ザリガニを取ることを目的の一つとして、いざお散歩を始めてみると、期待通りにはいかず一向にザリガニは取れる気配がない。保育者の「失敗」で採れなかったということも含めて、子どもたちにとって大切な経験になるのは「採れない」ということでもある。何事も便利になり、昆虫や水中生物もお金で買える時代にあって、子どもが自然について知るべきことは、自然の営みは人間の都合でどうにもならない面があること。どんなにザリガニを捕まえたいと思っても、自分たちの思い通りにはならないということを体験的に知ること、「自然は人間にはコントロールできない」という現実を知ることこそが、「自然との関わり」の根底にあるべきだろう。ま



図2 ザリガニを釣る子どもたち。竿にサキイカを付けて様子をうかがうが、釣れないままにお散歩は終わった。「自然との関わり」は、生き物に触れることがすべてではない。こちらの期待や都合通りにはいかない「自然」のありかたを体験的に知ることが重要。

た思い通りに捕れないからこそ、そこに工夫の余地が出てくる。言い換えれば、「自然との関わり」の中で、うまくいかない場面に遭遇すれば子どもたちでどうすればよいのかを考え工夫をする。このような場において子供たちの「協同性」を育み、「思考力の芽生え」を、またみんなで話し合う課程で「言葉による伝え合い」の意義を感じることができるようになってくるのである。

保育者は保育計画に則り、できるだけ予定通りに保育を進めたいという気持ちになることもあるだろうが、環境教育において保育者が求められるのは、環境はコントロールできないことを前提に、臨機応変な対応が取れる心的姿勢であると言えるだろう。「ザリガニが採れない」ということが、採れた時よりも子どもにとって教育的な契機になるのかどうかは、保育者の力量によるところが大きい。保育者養成においては、このような柔軟な思考力と臨機応変な対応力を養うにはどうすればよいのか、単に保育者個人の資質としてではなく保育者のスキルの一つとして考えることが、保育者養成において必要であろう。ま

た自然環境はコントロールできないという認識を持つことで、お散歩などの日常の保育における事故を未然に防ぐこともできるようになるであろうし、災害時の対応にさえも良い影響を与えるとと言っても過言ではないだろう。

保育記録4：6月11日（19日後）

隣のクラスと一緒に、ザリガニ取りへ出かけた。小さいザリガニとオタマジャクシばかり、と思っていたら、網にアメリカザリガニがかかり、一気に盛り上がり、足取り軽く園へ帰った。園に戻りさっそく、以前農作業のおじさんに取ってもらったザリガニのいる水槽に、新しいザリガニを入れて、次のような会話を始めた。

まりね「おともだち、できてよかったね」
かなと「オスカメスカ調べてみる。きっと、
オスとメスだよね」
みんな「イエーイ」
まりね「結婚するといいね。赤ちゃんできる
といいね」

さっそく図鑑で調べると、二匹ともメスで、子どもたちは大変残念がった。「また、つかみに行こっか」という事になったが、しばらく、園の行事や実習生が来たりして、ザリガニ取りには行けない日が続いた。

ドジョウやオタマジャクシ、ナマズなど、水槽にどんどん生き物たちが集まっていた。ある日、タニシとドジョウの入っているバケツに、赤い卵のようなものがべったりとバケツの淵についており、おどろいた子どもたちと図鑑で調べると、大型タニシの卵だった。こうして、増えていく生き物を囲んで、みんなで調べたりする日が続いた。

6月25日（33日目）

とうとう、子どもたちの手で、大きなザリガニを捕まえた。ようやく、オスとメスが揃って、子どもたちは大喜びをした。

ようやく自分たちでザリガニを捕まえることができたことで、子どもたちの興味関心はザリガニの生活へと移り、「生命の尊重」というテーマに広がっていくのだが、子どもたちの関心がザリガニに限らず、自分たちが川で出会う生き物全体に広がるのは当然であろう。ドジョウ、オタマジャクシ、ナマズ、タニシといった生き物にも目を向ける子どもたちの好奇心を保育者は大切にすることがいかに重要であるかを、この保育記録に見て取ることができる。

タニシの卵の「発見」はその好例である。「環境」で目指すのはザリガニの生態を学ぶなど、特定の生き物についての科学的な知識を得ることではない。知識はあくまでも付随的なものであり、保育者が留意すべきが、周囲の環境に対して好奇心をもって主体的に関わろうという心的態度である。いつでも図鑑



図3 捕まえた生き物がわからなかったら、その場ですぐに自分たちで調べる。「環境を通して行う教育」で大切なのは、自然に関わる課程で子供たちの気づきや疑問をその場で掘り上げ、次の気づきへと繋げられるような教育環境を保育者が事前に整えておくこと。

を見ることができる環境があれば、そしてたとえ字が読めなくても同じ生き物の写真が載っていることをいつでも確認できることが、自然と併せて学びへの好奇心を育むことになるのである。

(2) 第2期 くまぐみ水族館誕生

保育記録5：6月26日（34日目）

生き物のバケツで保育室がいっぱいになり、保育士は、どこにザリガニを置こうか、子どもの反応を見ながら試行錯誤している。バケツを保育室の中に入れると、保管遊びのコーナーを作ることができなくなってしまい、ロッカーの上に置くと、子どもの視線よりも高いところになってしまう。

ちょうど、町のエコカーテン運動の一環で、保育園でもベランダにプランタでゴーヤを栽培していたので、生き物の水槽やバケツを、ベランダのゴーヤカーテンの下においてみることにした。ゴーヤカーテンの下にベンチを置いて、子どもたちが観察や世話をしやすいように、高さを調節した。

図4の写真にあるように、保育士は子どもたちの興味や反応を見ながら、水槽をベランダに設置し、「くまぐみ すいぞくかん」と看板をつけた。この水族館では、子どもたちがすぐに調べることができるように、図鑑を置き、水槽の手前には、水槽の中にある捕まえた生き物の写真を置いた。またゴーヤカーテンの中には、楽しかった川遊びを思い出すことができるように、その時の写真を貼った。

こうして「くまぐみ水族館」が誕生して、子どもたちは、毎日水槽を囲んでお喋りをし、観察をして、子どもたちも自ら率先して水族館の手入れをするようになっていった。(図5)

図4および図5に見られるような「くまぐみすいぞくかん」は、子どもたちの想いや好



図4 いつの間にか色々な生き物が集まってくると、自然とそれは「水族館」へと進化する。

子どもたちの好奇心をどのように受け止め、それを尊重していくのか。学びの環境を作るのは、保育者であり同時に子どもたちなのだ。

好奇心を受け止め、それを発展させるにはどうすればよいのかという保育者の試行錯誤の結果でもある。決して初めから水族館を作ろうという意図をもって今に至っているのではないという点で、環境教育においてプロセスを重視する姿勢と重なると言えるだろう。ザリガニを捕まえられるとは限らないように、子どもたちの興味や関心の対象を保育者が（少なくとも明示的に）コントロールするのではなく、子どもたちが主体的に方向性を選び、自分たちで自分を取り巻く環境を作っているという意識を育てることが大切なのだ。『幼稚園指導要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の「環境」のねらいである「好奇心や探求心」を「生活に取り入れていこうとする力を養う」ための正解は一つとは限らず、園や保育者によっても様々であろう。ここでは、水槽やバケツの中の生き物の写真を前に置き、さらにはいつでも図鑑を見られるような状況を園内に作ることでそれを達成している。また川遊びの時の写真も併せてゴーヤの蔓に貼って遊びと環境での学びとを結び付けるのに成功している。

保育所保育指針の第1章総則（3）におい



図5 子どもたちは「くまぐみすいぞくかん」の生き物を自分たちの園での生活の一部として、世話をし、観察をすることで新たな発見や気づきを得ることができる。そこにはいつも想定外のことがある。

て、保育の環境は、（人・保育士や子どもなどの人的環境）、（物・施設や遊具などの物的環境）、（場・自然や社会現象）に分けられるとし、「保育所は、こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものになるように、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない」（p27）とあるが、保育者が気を付けなくてはいけないのは、「計画的に環境を構成し」という部分である。「計画的」であることと、子どもたちの行動のすべてを事前に決めてしまうこととは区別して考えるべきであろう。さまざまな可能性を想定するという意味では「計画的」であってもよいが、常に保育者は子どもたちの反応に合わせて臨機応変に対応できるような「計画性」あるいは「予見性」を持つべきなのである。その意味でこの「くまぐみすいぞくかん」は良いモデルともいえるだろう。

保育記録6：6月27日（35日目）

せっかくオスとメスが揃ったザリガニだったが、オスが強すぎたのか、メスが死んでしまい、クラスみんなでガッカリしてしまった。

「またメスをつかまないと、いかん」と散歩に出かけたが、残念ながら収穫はゼロだった。

6月28日（36日目）

めげずに次の日もザリガニ取りに出かける。保護者や近所の人たちから、どこにザリガニがいるか情報も集めて、川へ出かけ、大きなオタマジャクシ、エビ、小魚、なまず、シジミは捕まえたが、肝心のザリガニは捕まえることはできなかった。

とうとうメスのザリガニを捕まえることはできないままに、プールの活動も始まり、クラスでのザリガニ散歩は終わった。

7月9日（47日目）

保育士が家からザリガニいっぱい持って来て、その中から1匹のメスをもらった。しかしオスとの相性が悪く、「先生、ザリガニ、ケンカしてる」「あーだめだー」など、子どもたちの見守る中で、このお見合いもうまくいかなかった。

7月10日（48日目）

次に譲りうけたメスは、相性がよかったらしく、今度はケンカをせずに水槽で暮らしていた。

7月11日（49日目）

帰りの時間に、子どもたちがザリガニが交尾しているのを発見した。

「先生、ひつついてるよ」（なぜか、小さい声）

「チューしてるよ」

「さっき結婚しとった」

「良かったねー」「楽しみだねー」

こうして、めでたく卵を産み、たくさんの小さな赤ちゃんザリガニが誕生した。

このお散歩を通したザリガニや水生生物をめぐる環境教育は、7月8日の段階で終わっても良かったであろうし、それでも十分「環境を通して行う教育」の目的は十分に達成されたのは、これまでの保育記録を見ても明らかだろう。ザリガニを採ってくるというある意味で「想定外」の出来事から始まった環境を通しての学びは、子どもたちに多くのことを体験する機会を与えていることは明らかだ。また、子どもたちがザリガニについて語る言葉からは、保育記録2で「ザリガニにお友達ができてよかった」と子どもが言ったように、疑人観 (anthropomorphism)、つまりザリガニなどに人間の特徴を重ねて考える様子も見て取れる。子どもたちはザリガニや水生生物の観察を、必ずしも生物学的あるいは科学的な視点で見ているのではない。こういった子どもたちが交わすやり取りの中に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で挙げられている(7)自然との関わり・生命尊重、(9)言葉による伝え合い、(10)豊かな感性と表現といった側面を見ることは難しくない。

また、保護者や近所の人たちがザリガニがどこにいるかを教えてくれたということも、保育の一面として重要であることは意識しておくべきであろう。お散歩のときもそうであるが、保育園での活動に地域住民の協力が当たり前のように見られるのは、幸田町の保育園の恵まれた点だと言っても過言ではないだろう。「育ってほしい姿」には「社会生活との関わり」もあるが、お散歩保育という活動は自然と近隣の人々など地域コミュニティとの関わりができることは珍しくない。保育園あるいは幼稚園での活動は、その周辺のコミュニティとどのような関係を構築すべきであるのか、ということが「環境を通して行う教育」においても勘案すべき点と言える。紙幅の関係で本論ではこの点について深く論

じられないが、保育・幼児教育における環境としての近隣の地域コミュニティについては、しっかりとした考察を行うべきであろう。

(3) 第3期 ザリガニの赤ちゃんと冬眠

保育記録7：12月5日

子どもたちが図鑑で、ザリガニは体温調節ができず、冬は陸に上がって、土に潜って冬眠することを調べていた。みんなで話し合い、「逃がした方がいいよ」「つかまえた川に逃がした方がいいよ」という結論が出て、ザリガニを捕まえた川に逃がすために散歩に出かけた。大ザリガニは子どもたちの前で土に潜り、赤ちゃんザリガニは、それぞれ散らばって泳いでいった。「大きくなってねー」「さようなら」「また会おうねー」と声をかけ、「よかったね！これで安心」という雰囲気ですぐに帰った。

保育記録6から約5か月後に再びザリガニについて保育園での大きな活動が行われるのだが、子どもたちはこのザリガニたちを飼育し、観察を続けてきたのである。このような生き物を観察する活動は、どのように終えるのか(あるいは終わるのか)が教育的にも重要である。保育者はザリガニの生態を子どもたちに調べる機会を与え、冬眠の意味や生き物の命の大切さを様々な角度から考える機会を与えたようである。「生命尊重」を環境を通してどのように学ぶことができるかを考えたときに、多くの保育者の頭に浮かぶのが生き物を飼育することであろうが、「いかに飼育を終えるのか」に思い至る保育しは案外に少ないのかもしれない。また、ザリガニを逃がすという選択を、子どもたちが話し合っただけで決めるという、決定までのプロセスも注目してよいだろう。「環境」の「ねらい」にあるように、「他の子どもの考えなどに触れて新し

い考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つ」ようにする機会は、こういった場面にもあるのだ。

（4）保育記録を読むこと：まとめ

以上のように保育記録を丁寧に読み解くことで、「環境」を通して子どもたちは何をするのどのように体験し、また学ぶことができるのかを明らかにしてきた。優れた保育実践における一つ一つの活動や発話には、『幼稚園要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』に裏打ちされた保育者の教育方針と想いを見て取ることができる。

今回とりあげた保育記録では、子どもたちが、ザリガニのオスとメスをつがいになろうと計画し、餌をつけた竿を持って出かけたり、ザリガニの生息している川の情報を得て散歩に出かけるものの、何度散歩へ出かけても、ザリガニを捕獲ができない失敗の記録である。しかしこれは、簡単に失敗の記録ということでもない。子どもたちは、自然を相手にした時に、何度チャレンジしてもうまくいかない事、計画通りに物事は進んでいかないことを事を学んでいる。

ザリガニを取りたいと思って散歩へ行っても、オタマジャクシやシジミなど、他の生き物ばかりが集まっていき、今回は、結果的に水族館ができてしまった。計画通りにいかず、計画からどれだけずれてしまうかどうか、そのずれに対して、保育士はどういうふうに対応するか。この実践記録では、物事が想定外の方向に進展するのに応じてどのように保育士が対応したのかがよくあらわされている。『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』においては、プロセスが大事と説かれているが、なぜプロセスが大事かと考えると、思うよう

にならない時に、保育士と子どもたちはどう工夫するとかが大切なのである。思うとおりにいかないからと言って、それが失敗と思う必要はないのである。

今回の保育事例において目的を達成するという事は、ザリガニを取るのではなく、実は子どもたちが自然とどのように向き合うべきかを学び、「(自然) 環境は自分たちの思うようにならない」ということを理解し、「思うようにならない」場合にどうすればよいのかを考えることが大切なのである。さらに、このような環境を通しての学びが可能なになるのは、熟練の保育士にとっては無意識のうちに行う柔軟な対応であるが、新任の保育士には難しい側面も多々あるだろう。このように考えると、お散歩保育を中心とした「環境を通した学び」のさまざまな場面は、保育者の成長の契機にもなりうるのであり、保育者養成の観点からも「環境領域」は重要なのである。

今回のように自然の中で「思い通りにならない」を学ぶ機会を子どもに提供する際に最も重要なことは、安全対策を万全にしておくことであるのは言うまでもない。ザリガニを取りに行く前には、必ず、保育士は川の様子とまわりの草の様子、それから近所の人に「ザリガニがいるか」どうかの聞き取りも行っている。「思い通りにならない」、あるいは想定外のことが起こりうる場において、子どもの安全や危険回避にはあらゆる可能性を考えた事前の準備が不可欠である。今回の保育実践においても、万全の危機管理が行われていたことは述べておきたい。

Ⅲ. おわりに

幼児教育における環境教育というのは、小学校の理科教育のようではなく、図鑑を持って来て、花の名前を覚えたり、虫の名前を覚

えたりするように知識を覚えていくことではない。多くの保育園で、園庭で植物を栽培したり、動物を飼ったりすることがあると思うが、それは自然と親しんだり観察することだけが大事でなくて、思うとおりにならない（自然）環境といかに関わるかを、子どもたちが体験しながら学ぶことが大切である。

保育士は、日々の保育の中で、保育室の環境だけでなく、保育室の外で出会う子どもの環境を、変化に応じて、保育に生かせるように柔軟性を持つことが大事であり、常に保育室の自然環境と屋外の自然をどうつなぎ合わせるかを考えることが求められる。保育室の中だけの環境では十分でないし、一時的に外に出た環境教育は、知識として成り立っていても、自然や環境と向き合うことに不十分になる。日常の生活と屋外の環境をどうリンクさせていくかが、環境教育で大事なことであろう。環境教育はバラバラになるものではなくて、保育室と保育園の外、両方をうまくつなげることが大事である。それが結果的に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

を実現することになるのだ。

幸田町立幸田保育園は自然と環境に恵まれた保育園であり、経験豊富な保育者の実践だからこそ今回のような保育が行えたというのは事実である。しかし、「環境」で何を育てるのかを理解した上で、保育者が自分の置かれた環境を理解することで、さまざまな環境領域に関する保育実践が可能となるはずである。その意味で、この保育実践記録を読み解くことで明らかになったことは、自然環境に恵まれるか否かという保育園を取り巻く環境によって表面上は変わることがあっても、その目指すところは変わることはないはずであろう。

引用文献

『平成29年告知 幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉』チャイルド社 2017

参考文献

『新・保育実践を支える 表現』福村出版 2018
pp145-156